❄❄

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No.73, 2026.7

❄❄

北海道大学総合博物館ボランティアの会 2026 年度(第 24 回)総会の報告 ―― 在田 一則 1
「モノ」と「ヒト」をつなぐ博物館へ ―――――――――――――――――― 山内 太郎 2
キャンパスに咲く 150 年のタイムカプセル
～オオバナノエンレイソウが教えてくれる、じっくり生きる力強さ～ ―― 大原 雅 4
植物との出合い ―――――――――――――――――――――――――――― 加藤 平八郎 6
札幌で学ぶということ ―――――――――――――――――――――――― 吉田 修 7
北海道大学総合博物館の歴史的な標本とボランテイアの活動 ―――――――― 田中 嘉寛 8
第 11 回 日本古病理学研究会大会を開催しました ―――――――――――― 久保 大輔 9
「平成遠友夜学校 20 周年記念誌」発刊までのエピソード ―――――――――― 吉田 康祐 11

活 動 報 告

北海道大学総合博物館ボランティアの会 2026 年度(第 24 回) 総会の報告

ボランティアの会 会長 在田 一則

北大総合博物館ボランティアの会第 24 回総会および講演会が 2026 年 5 月 29 日(金)午後に総合博物館 1 階「知の交流コーナー」において開催されました。以下に簡単に報告いたします。

総会 (13:30～14:00)

総会は 18 名が参加して、星野さんの司会のもとで行われ、会長挨拶の後，以下の 2025 年度活動報告および 2026 年度活動計画の提案があり，承認されました。

1. 2025 年度(2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日) 活動報告

(1) 総会と講演会の開催
第 23 回総会を 2025 年 5 月 30 日 (金) に開催した。
総会後には、琴似屯田子孫会事務局長の永峰 貴さんによる「開拓使最初の屯田兵村 琴似」と題した講演があった。

(2) ボランティア談話会の実施
2025 年度は実施しなかった。

(3) 博物館に押しかけよう会の実施
以下の 3 回行った。
・2025 年 6 月 22 日 (日) 第 31 回 (琴似 屯田兵村兵屋跡)、11 名参加、琴似屯田子孫会事務局長永峰 貴さんに案内していただいた。
・2025 年 9 月 21 日 (土) 第 32 回 (北大植物園)、19 名参加、チェンバロボランティアの石川弘晃さんに案内していただいた。
・2025 年 11 月 22 日 (土) 第 33 回 (北海道庁旧本庁舎 赤れんが)、13 名参加、札幌

観光ガイドの会の武石詔吾さんに案内していただいた。

(4) ボランティアニュースの発行
以下の 2 号を発行した。
・ボランティア ニュース第 71 号（8 ページ）2025 年 9 月
・ボランティア ニュース第 72 号（6 ページ）2026 年 2 月
毎号 700 部～800 部を発行。北大正門のインフォメーションセンター「エルムの森」のほか、東京の北大オフィスにも送っている。
ボランティア ニュース編集委員会（星野フサ・今井久益・久末進一・山岸博子）を適時開催した。

(5) ボランティアグループ連絡会
2025 年度はほぼ隔月に 6 回開催した。
2 か月ごとに原則金曜日の午後 1 時 30 分から S224 で開催しています。

(6) 各グループの状況　（2026 年 4 月 1 日現在のボランティア登録者数は 14 グループ、延べ 217 名）
植物・菌類(43 名)、昆虫(22 名)、考古学(27 名)、化石(28 名)、北大の歴史（5 名)、展示解説(15 名)、平成遠友夜学校（8 名)、4D シアター(10 名)、チェンバロ(10 名)、図書(10 名)、第 2 農場(14 名)、ハンズオン（6 名)、きたみてガーデン（3 名)、地学（16 名）

3. 2026 年度の活動予定
(2026 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日)
各指導教員のもとでグループ活動に協力するとともにボランティアどうしの交流をさらに深める。

(1) 全体の活動
勉強会（ボランティア談話会・博物館へ押しかけよう会など)・懇親会を適時開催する。

(2) ボランティア ニュースの発行
年 4 回の定期発行に向けて努力をする。各グループの活動の報告記事を発掘する。

(3) 2024 年度グループ連絡会
在田、星野、山岸、石田、須藤、外山、新妻
金曜日の午後 1 時 30 分から総合博物館 2 階 S224 で開催しているので、どなたでも参加をお待ちしています。

講演会（14:00～15:45)
講師：　中沢祐一さん
（総合博物館准教授、考古学)
演題：　北海道の山はいつから人の場だったのか？

新館長挨拶

「モノ」と「ヒト」をつなぐ博物館へ

北海道大学総合博物館館長 山内 太郎

2026 年 4 月より、北海道大学総合博物館の館長を務めることになりました山内太郎です。どうぞよろしくお願いいたします。

これまで私は、人類学や国際保健の分野で研究を続けてきました。主な関心は、標本や資料そのものというよりも、「ヒト」、すなわち人々の暮らしや健康、そしてそれらを取り巻く環境との関係にありました。パプアニューギニア、インドネシア、ザンビア、カメルーン、そして日本の地域社会を訪ね、人々がどのような環境の中で暮らし、健康を守り、次の世代につないでいるのかを見つめてきました。

そのような自分が、標本や資料を大切に守り、伝える博物館の館長を務めることになったことに、不思議なご縁を感じています。同時に、大きな責任も感じています。博物館にある「モノ」は、ただそこに置かれているだけではありません。その一つひとつの背後には、自然の歴史、人間の営み、研究者の努力、そしてそれを守り伝えてきた多くの方々の思いがあります。これまで「ヒト」を見つめてきた自分の視点を活かしながら、モノとヒト、大学と社会、過去と未来をつなぐ博物館づくりに力を尽くしたいと考えています。

北海道大学総合博物館は、1999 年の設置（開館は 2001 年）以来、本学の教育・研究の成果を社会に発信する拠点として歩んできました。約 300 万点に及ぶ標本・資料は、大学の長い研究の蓄積であり、未来の教育・研究を支える大切な財産です。また、総合博物館は、学生の教育の場であると同時に、市民の皆さまに開かれた学びの場でもあります。そして、その活動を日々支えてくださっているのが、ボランティアの皆さまです。展示室で来館者に声をかけ、資料の魅力を伝え、博物館と地域をつないでくださる皆さまの存在は、総合博物館にとって欠かすことのできない力です。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

さて、ここからは、私自身の研究について少し紹介させてください。近年、力を入れているテーマの一つに、サニテーション、すなわち水や衛生、トイレに関わる研究があります。トイレというと、日常の中ではあまり積極的に話題にしないものかもしれません。しかし、トイレや水、手洗い、排泄物の処理は、私たちの健康を支えるもっとも基本的な仕組みです。そしてそれは、単に技術を導入すれば解決する問題ではありません。

たとえば、アフリカのザンビアの都市部では、子どもたちが自分たちの暮らす地域の課題を写真や絵で表現する活動を行ってきました。子どもたちの目を通して見ると、壊れた排水路、ごみ、雨季に冠水するトイレなど、地域の衛生環境がとても具体的に見えてきます。研究者が外から問題を決めるのではなく、地域の人々、とくに子どもたち自身が課題を「自分事」として捉えることが、解決への第一歩になります。

インドネシアでは、小学校にコンポストトイレを設置し、し尿を資源として活かす循環の仕組みづくりに取り組んできました。排泄物をただ捨てるのではなく、適切に処理し、堆肥として利用し、地域の農業や教育につなげていく試みです。トイレは「汚いものを遠ざける場所」ではなく、健康、環境、食、学びをつなぐ入口にもなり得ます。

また、日本の過疎山村では、高校生が地域の水インフラを守る活動に参加しています。人口減少が進む地域では、これまで当たり前に維持されてきた水路や水道の管理が難しくなっています。そこで、若い世代が地域の方々とともに水の流れを調べ、地図にし、未来に引き継ぐ活動を行っています。ここにも、次の世代とともに地域の暮らしを支えるという、大切な学びがあります。

これらの研究に共通しているのは、サニテーションを単なる設備や技術ではなく、人と人、人と環境をつなぐ「価値の連鎖」として捉える視点です。トイレの先には、健康があり、環境があり、地域のつながりがあり、未来を担う子どもたちの学びがあります。これは、博物館の活動にも通じるものがあるように思います。標本や資料もまた、それだけで完結するものではなく、そこから人々の対話や気づきが生まれ、次の学びへとつながっていきます。

大学の博物館は、まさに「大学の顔」であり、社会との接点です。専門的な知を分かち合うだけでなく、市民の皆さまとともに学び、考え、新たな価値を共に創り出していく場でありたいと思います。

これまで築かれてきた総合博物館の基盤を大切にしながら、スタッフ、関係者、そしてボランティアの皆さまと力を合わせ、より一層、社会に開かれた博物館を目指してまいります。

今後とも、皆さまのご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

アフリカ熱帯林（カメルーン）の狩猟採集民のこどもたち

特別寄稿

キャンパスに咲く１５０年のタイムカプセル

～オオバナノエンレイソウが教えてくれる、じっくり生きる力強さ～

北海道大学総合博物館資料部研究員　大原 雅

北大のマークに隠された「秘密」

みなさんは、北海道大学のバッジやノート、マグカップなどのグッズにあしらわれている、緑色のきれいで上品なマークを見たことがありますか？「あ、見たことある！」という方も多いのではないでしょうか。あのマークが北大の校章で、そのモチーフになっているのは、春の北大キャンパスを白く彩る「オオバナノエンレイソウ」という植物です。

大学のシンボルになっている植物が、キャンパス内にある森にそのまま自生している大学は、全国でもきわめて珍しいのです。大都会・JR 札幌駅から歩いてすぐの場所にありながら、この植物がのびのびと暮らせる豊かな原生林がそのまま残されている―それこそが、北海道大学の誇る素晴らしい環境の証しでもあります。

今回は、そんな北大のシンボル植物でもあるオオバナノエンレイソウが持つ、驚くべき「生き方の秘密」を少し覗いてみましょう。

開花までに 10 年以上！驚きの大器晩成

オオバナノエンレイソウの生き様は、一言でいうと「超・大器晩成型」です。まず、森の地面に落ちた小さな種子が発芽し、最初の葉を出すまでに、数年の年月がかかります。ようやく発芽した実生（みしょう）個体の姿は、シンボルマークに描かれている３枚の葉を持つ花の姿とは似ても似つかない、小さく２ｃｍ程度の細長い１枚葉です。この実生個体からオオバナノエンレイソウの一生がスタートします。彼らは毎年、春のわずかな期間（５月～６月）だけ葉を広げ、落葉広葉樹林の木々が葉を茂らせる前の明るい太陽の光を浴びて、地下の根っこ（根茎）にコツコツと栄養を蓄えていきます。実生から１葉個体、３葉個体へと少しずつ成長し、そうして初めて白くて大きな花を咲かせるまでに、なんと 10 年から 15 年もの歳月が必要なのです。

オオバナノエンレイソウのさまざまな生育段階
実生個体（細長い１枚葉）、１葉個体、３葉個体

いま、この文章を読んでいる高校生のみなさんが、生まれてから今日まで歩んできた時間と同じくらいの長さを、彼らは「花を咲かせるための準備期間」として、じっと暗い森の中で過ごしています。まわりの他の草花がすぐに芽を出して花を咲かせるなかでも、決して焦らず、自分のペースで力を蓄え続けているのです。

一度咲いたら「一生モノ」：息の長い生命力

「咲くまでにそんなに時間がかかるなら、咲いた後はすぐに枯れてしまうの？」と思うかもしれません。しかし、ここからがオオバナノエンレイソウの本当のすごさです。

長い下積みを経て、ついに花を咲かせる強さを手に入れたオオバナノエンレイソウは、そこからさらに数十年、時にはそれ以上の長きにわたって、毎年、毎年、大輪の白い花を咲かせ続けることができるようになります。因みに、私が大学院に進学した 1980 年に観察を始めたある開花個体は、今年、2026 年の春も元気に開花していました。46 年

間、生存し、毎年開花しているのです。種子から開花までの道のりを 10 年としたら、優に 50 年を超えて生き続けていることになります。果たしてこれから先、何年開花を続けるのでしょうか？北海道大学は今年 (2026 年) で、1876 年の創基から 150 年を迎えます。ひょっとしたら、今、キャンパス内に咲くオオバナノエンレイソウたちの中には、150 年前から咲き続け、北大の歩みをずっと見続けてきている個体がいるかもしれません。

一瞬だけ派手に咲いてすぐに散ってしまうのではなく、一度身につけた強さを活かして、息長く輝き続ける。この「地道な積み重ねの先にある、揺るぎない持続力」は、まさに北大が大切にしている「実学の精神」や、何十年も粘り強く真理を追い求める基礎研究のスタンスとも深く重なっています。

焦らなくていい。じっくり根を張ろう

もし、今あなたが「なかなか勉強の成果が出ない」、「まわりの友達と比べて焦ってしまう」と悩んでいるなら、北大のキャンパスの森に咲くオオバナノエンレイソウのことを思い出してみてください。すぐに結果が出ないからといって、落ち込む必要はまったくありません。あなたが今、地道に机に向かって蓄えている知識やエネルギーは、決して無駄にはならず、将来のあなたを何十年も支え続ける強固な「根っこ」になっているはずです。北海道大学には、そんなオオバナノエンレイソウのように、長い時間をかけて自分だけの大きな花を咲かせようとする人を、温かく包み込み、全力で応援する最高の環境が整っています。

どうしてそんなことが言えるのかって？ だって、まさに私自身がそれを体験したのですから。私は、ちょうど 50 年前の 1976 年、北大創基 100 年の年に入学しました。実は、当時の私は高校での成績があまり芳しくなく、担任の先生からも「北大受験は無理じゃないか」と言われていました。また、「なんでそんなに植物の勉強がしたいんだ」と執拗に質問され、うまく答えられずに困ったこともあります。それでも、子供のころから野に咲く植物が大好きだった私は、「どうしても北大で植物の勉強がしたい！」という一心で受験し、幸いにも合格することができました。入学後は農学部に進み、卒業後は大学院環境科学研究科（現在の環境科学院）に進学しました。そこで出会った「植物の生活史研究」が本当に面白く、夢中になって研究にのめりこんでいきました。

今、50 年の月日を振り返ってみても、私の歩みは決して早いものではありませんでした。研究がうまく進まなかったり、論文執筆が滞ったりして、気持ちが折れそうになることも多々ありました。2023 年に教員を定年退職しましたが、大変な時、辛い時にいつも助けてくれたのは、北大のキャンパスに集う仲間たちや、私の研究室を選んで来てくれて、共に汗を流した学生たちでした。そんな素晴らしい人間関係をじっくりと育んでくれる場所こそが、北海道大学のキャンパスなのです。

春、キャンパスが白く染まる季節に、ぜひこの森を歩いて、彼らの生命力を肌で感じてみてください。あなたの挑戦を、北大の自然と先輩たちが、心から待っています。

石狩市で見られるオオバナノエンレイソウの大群落
150 年前の北大のキャンパスにもこのようにな群落が見られたかもしれない。

特 別 寄 稿

植物との出会い

白老町 加藤 平八郎

私が 1946（昭和 21）年に十勝農業学校に入学した時、担任の池田好郎先生は「植物」なる教科を担当していた。その学習の中に「植物標本作製」の指導があった。この要領に従って、夏休みに十数点の「植物標本」を作製して提出した。この標本は間もなく点検を終えて戻ってきた。植物名の不明な標本には、正しい植物名が書かれ、間違った植物名は訂正されていた。これが、私が植物と付き合うことになる最初の体験であるが十年位は続いたように記憶する。

その後、池田先生は帯広農業高等学校の校長として着任した。植物標本を郵送して植物名を確認する習慣は、まだ続いていた。そんな或る日、植物に関する相談があるので、来て貰えないかとの連絡を受けた。校長室へ池田先生を訪問すると、机の上に送付した標本が広げられているが、点検した気配がない。

池田先生はおもむろに話し始めた。「草や樹木ばかりが植物ではない。菌類（きのこ）や地衣類も植物の仲間だ」「日本には、それぞれの分野で先達が居る。それ等の先生を訪ねて教えを受けろ」と語るのである。四年間（学制改革の影響で四年間）指導を受けた担任の先生の言葉の意味は理解できた。

当時、帰化植物の新種が日本で発見される時期で、長田武正先生(1912-2002)がその分野で活躍していた。珍しい植物を採集したものと思っていると、それは当時外国から日本に帰化したばかりの外来種であることが多かった。それで長田先生の指導を受ける機会が多くなった。

長田先生に不明な植物標本を送ると、確認の必要な植物は、先生はその標本を携えて『日本植物誌』(1953)の著者である大井次三郎先生(1905-1977)を訪ねて確認すると言う几帳面な人柄であった。また、確認に用いた標本は全て「国立科学博物館」に納めるという方法をとっていた。そして、その結果は手紙で知らせてくれた。ある折の手紙に「あなたが他界した後でも、標本は博物館に残っている」という意味の記述があって、驚いたことがある。

植物に関する初歩的な指導を受けながら、植物と接して行く中で、長田武正先生は『原色日本帰化植物図鑑』(1976）を出版した。この文献の「はじめに」の部分に「さらに資料の蒐集や採集地の案内に協力いただいた方は、加藤平八郎（北海道)」以下十三人の名前が紹介されている。私以外は全て本州の人たちである。

本文の中には、「ヤネタビラコ（キク科)・クロアザミ（キク科)・シバツメクサ（ナデシコ科)」など、当時北海道に帰化した植物名が紹介されている。いずれも、私が採集した標本をもとに描かれたものであった。それに、今、この図書を開くと表紙の内側に《贈呈》とゴム印が捺されていて、当時のよろこびが蘇る思いである。

加藤平八郎コレクションは、国立科学博物館が運営する自然史系標本セーフティネットを通して 2020 年 9 月頃当館に寄贈依頼がありました。維管束植物だけでなく、菌類、海藻、蘚苔類、地衣類を含む、3,000 点以上のコレクションであったため、阿部剛史先生、小林孝人先生、首藤が相談し、それぞれの分類群の標本を陸上植物標本庫（SAPS）,海藻標本庫(SAP)、菌類標本庫（SAPA）で引き受けることになりました。

（首藤 光太郎）

加藤平八郎氏から寄贈された標本の中に、1976（昭和51）年8月19日に札幌・手稲前田で採集され、「ヤガミスゲ」と同定されていたものがありました。また、北大総合博物館の標本庫には同年同日に同場所で採集された原氏（ラベルには苗字のみ記載）のスゲ標本もありました。こちらは未同定でしたが、加藤氏の標本と同様のスゲに見えました。加藤氏は、原松次氏と一緒に採集されていたのでしょうか。

最近、スゲに詳しいボランティアの藤田玲氏が、これらはヤガミスゲではなくクシロヤガミスゲであることを確認し、種名を修正しました。

実はクシロヤガミスゲは帰化植物で、北アメリカ北部原産。わが国では1984年に白糠町の牧場で滝田謙譲氏により初めて採集された植物とされています。つまり、加藤平八郎氏が採集した「ヤガミスゲ」が滝田謙譲氏より8年前の日本初のクシロヤガミスゲの採集記録となりました。　（本多 丘人）

活 動 報 告

札幌で学ぶということ

北海道大学理学院修士1年・進化古生物学研究グループ 吉田 修

福岡県の郊外から2000km北上し、札幌で暮らし始めた私がまず抱いた印象は、「風が強い」ということだった。最初は「とにかく寒いのだろう」と考えなしに厚着で過ごした。しかし、実際には気温はさほど問題ではなく、それよりも厄介なのは、肌の露出部を鋭く削る風だった。

私の所属は絶滅した生物を対象とする研究室で、太古のワニの研究をしている。昨年はモンゴルで発掘調査にも参加した。昔から恐竜少年だった私は、古生物学の権威たる先生が在籍する、この研究室に憧れがあった。今は古生物研究を自分の職とするという次の目標に向け勉強を続けている。

先日、「来館者に卒業研究を説明する」という博物館の催しに参加し、ポスター発表を行った。そこでの素敵なご縁により、本誌に文章を寄稿させてもらう運びとなった。「北大を志望する来年度の受験生に向けて」という趣旨だったため、大学や進路などについて述べさせていただく。

これは自身が今そうだから言えるのだが、ここ数年、生活に余裕がない人が多いように思う。私の場合その原因は、研究で結果が求められるプレッシャーか、諸々の手続きや連絡に追われて液晶ばかり見ていることか、複合的な理由だろう。受験生の中にも、単調な生活の中で余裕を失い、勉強に身が入らず、そんな状況に自己嫌悪して、さらに余裕がなくなり… という悪循環に陥っている人がいるのではないかと推察する。そういったとき、一旦、スマートフォンなどを置いて、景色を眺めることをお勧めする。そして少し息抜きした頭で考えると、やるべきことは意外とシンプルだったりする。仮にそうでないとしても、大切なのは自分の身の丈(≒作業能率)を知って、ざっくりとした計画を立てることだと思う。そのためには焦っても詰め込んでも、逆効果なことが多い。受験勉強に万能薬はない。電車の窓から流れゆく光景でも横目に、問題点を簡潔にまとめて、優先度順にできることだけやる計画を立てる。そんなどんと構える余裕をもってみてはどうだろうか。

将来の進路や専攻分野に迷う人も同じだと思う。今ある材料で決まらないなら、急ぐ必要はないのではないだろうか。幸い、北大では「進路を軌道修正するハードル」が高くない。2年生から各学部に分属されるため、1年次に様々な講義を聞いて学部学科を決めることができる(文系から理系学部に進学もできる)。他大学から北大の学部に編入してくる人もいるし、大学院進学のタイミングで所属研究室を変える人も珍しくない。キャリア選択に関する講座も充実し、進路を変えたいと思ったら、案外何とかなる。

内情を知ってその分野や環境に対するイメージが変わることは、良くも悪くも往々にしてある。私は研究を始めて、古生物分野には夢見ていたロマンを追い求める発掘調査と、統計に基づく立派なサイエンスの側面が共存することを実感した。

進路を決めていない人も、来る大学生活では退路の存在をある種の身軽さに変えて、気楽に(あるいは無鉄砲に)様々な分野に飛び込んでみてはどうだろうか。だから今は、落ち着いて余裕をもって勉強に取り組んでほしい。私も身の丈に合った努力をしながら精進しようと思う。博物館前のナナカマドという木は、まだ芽を堅く閉じたまま風に揺れている。春はもう少しお預けのようだ。

ポスター発表する筆者
2026 年 2 月 28 日北大総博合博物館知の交流ホールにて。

活 動 報 告

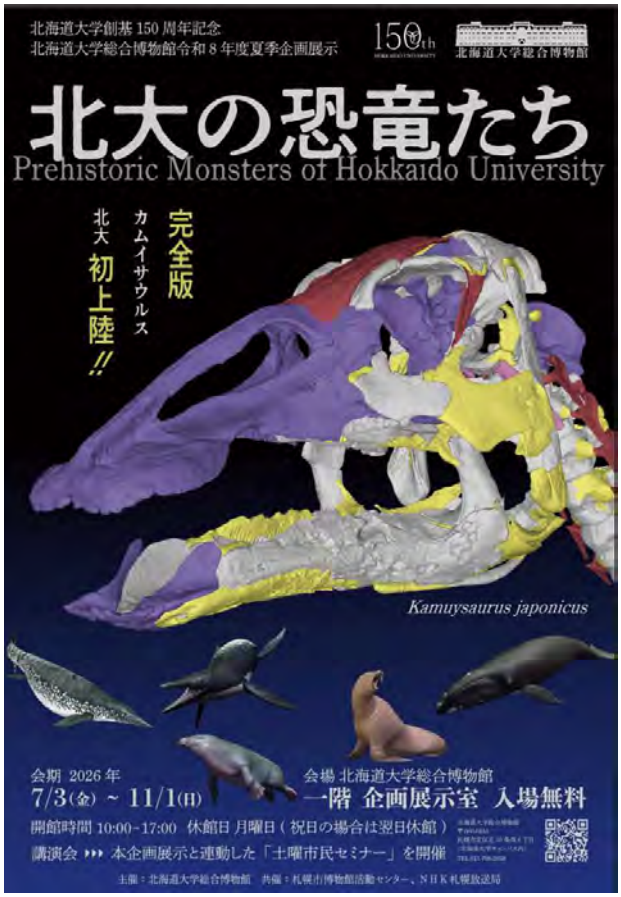
北海道大学総合博物館の歴史的な標本とボランティアの活動

札幌市博物館活動センター学芸員・資料部研究員　田中 嘉寛

企画展「北大の恐竜たち」

2026 年 7 月 3 日より 11 月 1 日まで北海道大学総合博物館で開催される企画展「北大の恐竜たち」には、カムイサウルスやサッポロクジラなどの脊椎動物化石が展示されます。この企画展は 2017 年に開催した企画展「北大古生物学の巨人たち」展のシリーズです。2017 年は北大理学部における古生物学の講座ができた 1930 年を起点に、第五代の加藤誠教授までを紹介しました。

今年の企画展では「1930 年以前」と、加藤先生以降の「現在」までの北大古生物学研究が紹介されます。北大 150 周年にピッタリの展示になるのではないかと思い、6 月現在、小林快次教授を主に、総合博物館のスタッフの方々、卒業生から現役の学生、そして化石ボランティアの皆さんと、おおぜいが関わって展示を準備しています。



北海道大学総合博物館令和 8 年度夏季企画展示
「北大の恐竜たち」のポスター

博物館ボランティアによる発見

「北大の恐竜たち」展では、1930 年以前の歴史ある標本がいくつか展示されます。そのうちのいくつかは、2009 年に当時総合博物館ボランティア

だった寺西辰郎氏（故人）が標本整理の最中発見した標本で、標本に付いているラベルから寺西さんは 1888 年から 1893 年に収集された歴史的な標本であると考えました。この経緯は『総合博物館ニュース』21 号に在田会長が詳細に書かれています。

展示が研究を促進させる

さて、「北大の恐竜たち」展の準備が始まったころ、資料部研究員の越前谷さんから「こんな標本がある」と寺西さんが見つけた標本の存在を教えてもらいました。いくつかの標本がありますが、ここではそのうちの一つの標本でヒゲクジラの下アゴと思われる標本についてご紹介します。

展示を作るにしても、なんだかわからない化石として展示するよりも、いつ、どこでだれがとった何なのか、わかる様にしたい。また、私は鯨類化石を専門としていますので、この鯨がナニモノなのか知りたく研究を始めました。

私が研究を始めた当初、標本は２点あり、天塩 152 と天塩 154 というラベルが付いているだけでした（図）。つまり化石産地は「天塩」というところまでしかわからなかったのです。ヒゲクジラ類の下アゴらしいとは思いましたが、写真をとり、形をよく見ても、残されている部分が少なくあまりよくわかりません。

進展がないまま時が流れていましたが、ふと、「もしかしたら 152 と 154 の間である、天塩 153 が収蔵庫のどこかにあったりして」と思い立ちました。寺西さんが集めた標本が収められた引き出しを次々と開けていくと、おもったとおり天塩 153 がみつかりました。これで天塩 152、153、154 と３標本見つけた事になりますが、面白いことにこの３標本は色と形が良く似ており、元々１本の下アゴだったらしいことがわかりました。間のピースである天塩 153 が見つかったおかげで、下アゴの形がハッキリとわかるようになりました。

天塩 153 の発見は喜びでしたが、さらに喜べることがありました。なんと標本ラベルが残されていたのです。この化石産地は留萌川であることもわかりました。調査を重ねることで、だれが、いつ採集したものかもわかるようになるかもしれません。

今回ご紹介したような、展示づくりがきっかけになって研究が促進されるという事例は博物館学の視点で捉えても面白いなと思います。そういう意味で、この天塩の標本は古生物学、歴史学、博物館学と色々な視点からみて面白い標本です。この標本の研究を現在進めています。

最後に、標本の研究を承諾くださった小林先生、北野先生、そして寺西さんの活動について教えてくださった在田会長にお礼申し上げます。

クジラのアゴの骨とおもわしき歴史的標本

活 動 報 告

第 11 回日本古病理学研究会大会を開催しました

北海道大学総合博物館准教授　久保 大輔

今回は私が所属している日本古病理学研究会の活動についてご紹介いたします。本研究会は、日本における古病理学の発展と普及を目的として、生物人類学分野の研究者を中心とする有志によって、2016 年 4 月に設立されました。現在の会員数は約 40 名で、その約 3 分の 2 は大学や博物館に所属する会員、残りはさまざまな立場から古病理学に関心を寄せる会員です。

2026 年 6 月 27 日（土）、総合博物館の後援により、本館 3 階実習室において第 11 回日本古病理学研究会大会を開催しました。台風の影響が懸念されましたが、事前申込の参加者は全員、無事に札幌会場まで到着されました。国外からは、ソウル大学医学部教授の申東勳先生が参加されました。また、有難いことに、会員でない来館者にもご参加いただきました。

開会に続き、金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員教授の藤田尚先生による「日本の古病理学―日本からアジア、そして世界へ―」と題した基調講演が行われ、若い世代への三つのメッセージが語られました。第一に、関連分野との交流を大切にすること。その好例として、縄文時代の成人では齲蝕（むし歯）が歯根面に集中するという観察結果に対し、歯科臨床の専門家の助力を得て高齢者の根面齲蝕との類似性を見いだし、歯周病との関連を示したご研究が紹介されました。第二に、国外に同じ志を持つ仲間をつくること。国際的な古病理学会の欧州会議でのエピソードや、韓国やモンゴルの研究者との信頼関係を築いてきた経験をもとに、人とのつながりの大切さが語られました。第三に、大局観を持つこと。個々の病変を丁寧に観察するとともに、ヒト・動物・環境の連関を総合的に捉えることと、成果をいかに社会へ還元するかという視点の重要性が強調されました。

基調講演に続く一般口頭発表は、紙面の都合上、ごく簡単に内容をご紹介します。

（1）聖マリアンナ医科大学の中村謙伸先生は、出産との関連から、江戸町人と武家の骨盤形態の違いを報告されました。（2）明治大学の谷畑美帆先生は、愛知県市杵嶋神社古墓群の中世被葬者の歯のストレス指標などを報告されました。（3）九州大学の蓮田賀子先生は、鹿児島県広田遺跡出土弥生人の前頭骨陥没や骨折治癒痕などを報告されました。（4）ソウル大学の申東勳先生は、古文書・古記録から古病理学的情報を読み解く実践例を報告されました。（5）新潟医療福祉大学の佐宗亜衣子先生は、神奈川県西ノ浜洞穴の弥生・古墳時代人骨の二次葬を示唆する骨の変化などを報告されました。（6）青森中央学院大学の藤澤珠織先生は、モンゴル鉄器時代チャンドマン遺跡出土人骨の乗馬習慣を示唆する骨病変を報告されました。（7）筆者は長崎大学との共同研究として、長崎県浜郷遺跡出土弥生人の距骨骨折を報告しました。

最後に、研究会の発展に長年貢献された藤田尚先生への功労賞贈呈式を執り行い、本大会を閉会しました。興味深い発表が数多くありましたが、各発表の質疑応答の時間を十分に確保できなかったことは、開催者として心残りでした。準備・運営にあたり、研究支援推進員室の皆様、本学歯学研究院高齢者歯科学教室の渡邊裕教授、同教室の大学院生の皆様、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの大藪由美子先生より多大なご支援を賜りました。ここに記して深く御礼申し上げます。

藤田尚先生による基調講演後の質疑応答の様子

活 動 報 告

「平成遠友夜学校 20 周年記念誌 学燈」発刊までのエピソード

夜学校生徒　吉田 康祐

「20 周年記念誌を、皆で出そうよーーー。」！火曜日の夜学校講義の最初に、藤田校長先生から発刊のお話があったのは学舎に星空が輝く晩秋の夜でした。あれから約半年間！皆様のお力で何とか奮闘の日々を経て、2026 年 6 月 23 日にやっと発刊にこぎつける事が出来ました。関係の皆様にお礼と感謝を込め、完成に至るまでの６つのエピソードと感想をご紹介させて頂きます。

●「一人でも多く、しかも本音で受講の感想体験を集めようぜ！」
生徒皆が、講義の感想！夜学校で感じる事！日頃生徒として社会情勢に感ずる事！それらを綺麗事ではなく本音で作ろうぜ！と毎週集約状況を冒頭に報告し総力で。

●「出来るだけ、多くの写真を載せましょうよ！」
講義中の真剣な固い表情だけでなく、時に笑い、時に口角泡を飛ばし、時に涙！ 実に多くの写真が残されておりました。ささやかな白黒写真ですが、是非ご覧を！

●「講演された諸先生皆様のご講義の記録は出来るだけ載せようぜ！」
2005 年４月から 2026 年３月までの講義記録を掲載すべく専任生徒 2 名が大奮闘されました。断片的に書き残された記録も掘り起こしほぼ完全な形として収録です！

●「歴代教頭先生、ご講演の先生の感想文は出来るだけ集めましょうよ！」
現実 20 年の経過！！教頭先生、ご講義の先

「平成遠友夜学校 20 周年記念誌 学燈」の表紙

生皆様は全国に散らばりご活躍中です。現時点でのご連絡先を、何とか探そうと各位に奮闘頂き多くの熱いご寄稿が実現！

●「あのコロナを乗り越え開校した日、忘れられないわ！」
記念誌 179 ページを是非ご覧ください。忘れもしない 2021 年 11 月 2 日！コロナ蔓延で休校を余儀なくされた苦闘を乗り越えた再開第一回講義の記録を！

●「年に数回の懇親会も、是非載せようぜ！」

記念誌 241～250 ページをご覧下さい。
皆が一品ずつ美味しいおやつを持ち寄り笑顔がはじける集い！エンディングは、「都ぞ弥生」１番～５番の熱唱で名残惜しく！

2026 年 7 月 7 日の遠友学舎
左から　毛利さん、小田さん、藤田校長。

参加者の皆さん

筆者

最後に記念誌の表紙をもう一度ご覧下さい。イラストは校長先生入魂の作成！
記念誌の全てを物語っており煌めく星空の彼方ではクラーク先生と新渡戸先生が微笑んでおられます。

北海道大学総合博物館ボランティアニュース No.73

◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会
（編集委員：星野フサ、今井久益、永岡明美、久末進一、山岸博子）
◆発行人：在田一則
◆発行日：2026 年 7 月
◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel: 011 -706-2658
◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。
https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/